

個人的な患難

<https://ichthys.com/Pet25.htm> からの訳



ロバート・D・ルギンビル博士

第一ペテロ 1 章 6-9 節 (イクシス訳) :

あなたがたは、この究極の救いを待ち望み、大いに喜んでいる。もっとも今は、しばらくの間、さまざまな試練によって苦しむことになるとしても、それは、あなたがたの信仰が本物であることが明らかにされるためである。その信仰が本物であることの証明は、火で精錬されてもやがて滅びる金よりも、はるかに尊い。そして、人生という炉の中で本物であることが証明されたあなたがたの信仰は、イエス・キリストが栄光のうちに現れる時、あなたがたにとって賛美と栄光と誉れとなるのである。あなたがたは、この方を一度も見たことがないのに、この方を愛している。また、今この時もこの方を見ることはできないが、この方を信じている。それゆえ、あなたがたは、やがて現される栄光ある未来を映し出す、言葉に尽くせない喜びにあふれている。あなたがたは、その時、**究極の賞**、すなわち、あなたがたの**いのちの救い**を勝ち取るのである。それこそが、あなたがたのこの信仰の目的であり、目標なのである。(第一ペテロ 1 章 6-9 節)

序論: ペテロ第一の手紙第 1 章のこの第二段落を終える前に、互いに切り離すことのできない二つの問題に触れておく必要があります。すなわち、(1) 個人的な苦難(上の 6 節で言及された「さまざまな試練」の激化)、そして (2) 個人的な救い(9 節の「究極の賞」、すなわち信仰の結果)です。今回の学びの主要な関心は第一の点、すなわち個人的な苦難にあります。信仰が個人的な苦難を**通過することによって**こそ個人的な救いという目標に到達するのですから、苦難そのものを直接取り扱う前に、この「究極の賞」について簡潔に確認しておくことは有益でしょう。

個人的救いという究極の賞： 救い——「あなたがたのいのちの救い」(上の 9 節)
——は、使徒パウロも確認しているとおり、すべての信者の第一の目的であり究極の目標です。

あなたがたは知らないのか。競技場で走る者は、みな走りはするが、賞を得る者はひとりだけである。あなたがたも、賞を得るように走りなさい。しかし、すべて競技をする者は、何ごとにも節制をする。彼らは朽ちる冠を得るためにそうするが、わたしたちは朽ちない冠を得るためにそうするのである。そこで、わたしは目標のはっきりしないような走り方をせず、空を打つような拳闘はしない。すなわち、自分のからだを打ちたたいて服従させるのである。そうしないと、ほかの人に宣べ伝えておきながら、自分は失格者になるかも知れない。(第一コリント 9 章 24-27 節; 参照 [ピリピ 3 章 12-16 節](#))

では、賞はどのように得られるのでしょうか。勝利はどうやってつかむのでしょうか。——本段落が語るとおり、信仰によってです。

わたしたちの信仰こそ、世に勝たしめた勝利の力である。(第一ヨハネ 5 章 4 節)

救いという究極の賞、すなわち最後の「勝利の冠」に到達するためには、私たちの信仰は耐え続け、この世の試練をうまく乗り越え、世の「火の炉」をくぐり抜けても焼き尽くされることなく通過しなければなりません。最終的な勝利者となるためには、人生の経験によって信仰が灰と化すのではなく、むしろ精錬される必要があります。この救いの賞は、私たちがただ誠実な信仰をもって主に従い続けるなら、必ず達成できるものです。その信仰が、最初に自らの十字架を担って主に従い始めるときに、たとえからし種ほどの小さなものであったとしてもです。なぜなら、この生と死をかけた戦いにおいて、主ご自身が私たちに必要なすべてを忠実に備えてくださるからです。

わたしの神は、ご自身の栄光の富の中から、あなたがたのいっさいの必要を、キリスト・イエスにあって満たして下さるであろう。(ピリピ 4 章 19 節)

思いわずらうな…あなたがたの天の父は、これらのものが、ことごとくあなたがたに必要であることをご存じである。(マタイ 6 章 31-32 節)

前回のレッスン(#22)では、信者がこの世において受ける試練に関する聖書の教え

を取り上げました。すでに見てきたように(上記[第一ペテロ 1 章 6-7 節](#))、試練はイエス・キリストの真の弟子すべてにとって避けることのできない定めであり、その信仰の真実性を証明するものです。そして、それは信仰生活において常に付きまとい続けるものです。

いったい、キリスト・イエスにあって信心深く生きようとする者は、みな、迫害を受ける。(第二テモテ 3 章 12 節)

しかし、すべての信者の人生には、試練があまりに苛烈になり、単なる試練のレベルを超えてしまうように思える時があります。こうしたキリスト者の「火のような試練」ともいえるべき試みと苦難は、まさに「患難」と呼ぶことができるでしょう。なぜなら、それは実際に、私たちの信仰を根底から揺さぶりかねない、激しい霊的戦いの時だからです。

愛する者たちよ。あなたがたを試みるために降りかかって来る火のような試練を、何か思いがけないことが起ったかのように驚きあやしむことなく、(第一ペテロ 4 章 12 節)

そのような個人的な患難の時には、信者である私たちは、信仰の歩みの中で積み上げてきた信仰の蓄えをすべて呼び起こさなければなりません。そうしなければ、「信仰の苗」が根不足のために、「御言葉のゆえの患難や迫害」に直面した時に枯れてしまう人の運命をたどる危険にさらされることになるのです。

石地にまかれたものというのは、御言を聞くと、すぐに喜んで受ける人のことである。その(すなわち、信仰の; 参照. [ルカ 8 章 13 節](#))中に根がないので、しばらく続くだけであって、御言のために困難や迫害が起ってくると、すぐつまずいてしまう([ルカ 8 章 13 節](#)『離れ去る』参照)。(マタイ 13 章 20-21 節)

信仰は、このような時を通り抜けてこそ、約束された救いに到達しなければなりません。聖書的キリスト教(異教と対照的に)によれば、私たちの確信の基盤は**自分の業**ではなく、イエス・キリストと、私たちのために十字架で成し遂げられたその御業への信仰であり続けなければなりません。神が私たちに求めておられるのは、ただ信頼し続け、従い続けることだけです。しかし、強い圧迫の時、個人的な患難の時には、信仰を保ち、忍び続けることが、並外れた度量や勇気を必要とする場合もあるのです。

砲火の下での勇気： 私たちがクリスチャンになるとき、私たちは人生を永遠に変えることになる驚くべき新しい旅路に踏み出すのです。

だれでもキリストにあるならば、その人は**新しく造られた者**である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが**新しくなった**のである。(第二コリント 5 章 17 節; 参照.[ガラテヤ 6 章 15 節](#); [エペソ 4 章 23-24 節](#))

神の力によって、私たちは瞬時にこの暗闇の国から神の御子の栄光ある御国へと移され([コロサイ 1 章 13 節](#))、父なる神ご自身の相続人となります([ローマ 8 章 17 節](#); [ガラテヤ 3 章 29 節](#); [エペソ 3 章 6 節](#); [テトス 3 章 7 節](#))。しかし、この身分の変化は「立場としてのもの」です。つまり、神の国の市民とされたという事実はすでに確定していますが、その現実的な効果や目に見える形での体験は、主イエス・キリストが再臨され、天の御国が実際にこの地上に確立される時までは完全には現れません。ですから、「神の子どもたち」という新しい身分は本当に驚くべきものではありませんが、それはこの悪魔の世における私たちの戦いの終わりを意味するものではありません。むしろ、多くの点で、私たちがイエス・キリストを信じたその瞬間から、真の戦いが始まるのです。この地上においては、悪魔が依然として支配しており、私たちが忠誠をキリストへと移したことによって、サタンの怒りを買うことになるのです([第一ペテロ 5 章 8 節](#))。

また、わたしたちは神から出た者であり、**全世界**は悪しき者の配下にあることを、知っている。(第一ヨハネ 5 章 19 節; 参照.[ルカ 4 章 5-6 節](#); [ヨハネ 16 章 11 節](#); [第二コリント 4 章 4 節](#); [黙示録 11 章 15 節](#))

聖書は明確です。キリストに従おうとすれば、抵抗に遭うのが当然であり、ときにはその敵対が非常に激しくなることも覚悟すべきです。

弟子たちを力づけ、信仰を持ちつづけるようにと奨励し、「わたしたちが神の国にはいるのには、多くの苦難を経なければならぬ」と語った。(使徒行伝 14 章 22 節; 参照.[ヨハネ 15 章 20 節](#), [16 章 33 節](#); [第二テモテ 3 章 12 節](#))

イエスは私たちに「代価を数えなさい」と言われました。つまり、弟子になる前に、これから自分が非常に困難な時を通ることを覚悟すべきだと教えられたのです([ルカ 14 章 25-43 節](#))。当然のことながら、悪魔とその手下たちは、私たちが日々自分の十字架を背負い、キリストに従おうとするすべての試みを妨げようとします([ルカ 9 章 23 節](#))。十字架を背負うというこのイメージは、まさにキリストの真の弟子が避けられない苦しみを負うことを、はっきりと思い起こさせるものです。

もし子であれば、相続人でもある。神の相続人であって、**キリストと栄光**を共に

するために**苦難をも共にしている以上**、キリストと共同の相続人なのである。(ローマ 8 章 17 節；参照 [使徒行伝 5 章 41 節](#)；[第二コリント 1 章 5 節](#)；[ピリピ 3 章 10 節](#)；[コロサイ 1 章 24 節](#)；[第一ペテロ 4 章 12-13 節](#))

ですから、霊的成長の歩みを一步でも前に進めようとするたびに、敵からの抵抗に遭うことを驚くべきではありません。私たちは、自分のクリスチャンとしての生涯がずっと「敵の攻撃のもと」に置かれるのだという事実を受け入れなければなりません。しかも、私たちが本当に頭を塹壕から上げて、イエスがその模範によって示してくださった道を前進し始めるほどに、その攻撃は激しくなるのです。ですから、もし私たちが本当に霊的に成長し、また神が与えてくださった奉仕を通して他の人々も同じように成長するよう助けようとするならば、その結果として必ず個人的な苦難に直面することになります。そのような敵対を生き延びるためには「砲火の下での勇気」、すなわち、私たちが避けられずに直面するサタンの抵抗に耐えうるだけの、強い信仰の力が必要なのです。

その上に、**信仰のたて**を手に取りなさい。それをもって、悪しき者の放つ火の矢を消すことができるであろう。(エペソ 6 章 16 節)

個人的患難： これまで何度も見てきたように、私たちの信仰の試練は霊的成長に欠かせない要素です(特に[第 22 課](#)を参照)。この問題は(すでに見たとおり)ペテロによって、私たちが今学んでいる第一ペテロの最初の段落の文脈の中で詳細に論じられています。そして、ペテロのこの扱いが、私たちがこの主題を取り上げるきっかけとなっています。新約聖書で「個人的な苦難」を表すのに用いられているギリシヤ語は $\theta \lambda \iota \beta \omega$ (thlibo／スリーボー) であり、文字通りには「強く押しつける」「狭い所に押し込める」という意味を持ちます。この定義は、イエス・キリストに信仰を告白する者に待ち受けていることを、鮮やかに予告しているものです。

クリスチャンとして、私たちは試されます。

クリスチャンとして、私たちの信仰は圧力を受けます。

クリスチャンとして、私たちは悪魔の攻撃を受けることになります。

そして、ある程度の日常的な反対や妨害を予期することはできますが、それに加えて、時には突如として、まるでハリケーンのような勢いで襲いかかる極端な試練を経験することも事実です。こうした試練こそ、真に「患難」、すなわち「個人的な苦難」の範疇に属するものであり、私たちは信仰に対するこの激烈で極端な挑戦に備えなければならないのです。

個人的苦難の諸原則：

1. 個人的苦難は、特別なことではない：

愛する者たちよ。あなたがたを試みるために降りかかって来る火のような試練を、何か思いがけないことが起ったかのように驚きあやしむことなく、([第一ペテロ 4 章 12 節](#))

2. 個人的苦難は、耐えられるもの：

あなたがたの会った試練で、世の常でないものはない。神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に会わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである。([第一コリント 10 章 13 節](#))

3. 個人的な苦難には、代替えがない：

「わたしたちが神の国にはいるのには、多くの苦難を経なければならない」([使徒行伝 14 章 22 節](#))

4. 個人的苦難は、信仰を浄化し精錬するために必要：

あなたがたは、この究極の救いを待ち望み、大いに喜んでいる。もっとも今は、しばらくの間、さまざまな試練によって苦しむことになるとしても、それは、あなたがたの信仰が本物であることが明らかにされるためである。その信仰が本物であることの証明は、火で精錬されてもやがて滅びる金よりも、はるかに尊い。そして、人生という炉の中で本物であることが証明されたあなたがたの信仰は、イエス・キリストが栄光のうちに現れる時、あなたがたにとって賛美と栄光と誉れとなる。([第一ペテロ 1 章 6-7 節](#)/英文直訳)

5. 個人的苦難は、霊的成熟の徴(その欠如は未成熟の徴)：

ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神、あわれみ深き父、慰めに満ちたる神。神は、いかなる患難の中にいる時でもわたしたちを慰めて下さり、また、わたしたち自身も、神に慰めていただくその慰めをもって、あらゆる患難の中にある人々を慰めることができるようにして下さるのである。それ

は、キリストの苦難がわたしたちに満ちあふれているように、わたしたちの受ける慰めもまた、キリストによって満ちあふれているからである。わたしたちが患難に会うなら、それはあなたがたの慰めと救のためであり、慰めを受けるなら、それはあなたがたの慰めのためであって、その慰めは、わたしたちが受けているのと同じ苦難に耐えさせる力となるのである。だから、あなたがたに対していただいているわたしたちの望みは、動くことがない。あなたがたが、わたしたちと共に苦難にあずかっているように、慰めにも共にあずかっていることを知っているからである。(第二コリント 1 章 3-7 節)

あなたがたは、罪と取り組んで戦う時、まだ血を流すほどの抵抗をしたことがない。(ヘブル 12 章 4 節)

6. 個人的な苦難は喜びの源にさえなりうる:

(議会は)使徒たちを呼び入れて、むち打ったのち、今後イエスの名によって語ることが相成らぬと言いわたして、ゆるしてやった。使徒たちは、御名のために恥を加えられるに足る者とされたことを喜びながら、議会から出てきた。(使徒行伝 5 章 40-41 節)

7. 個人的な苦難は最悪のタイミングでやって来ることが多い(悪魔は狙いを定めて襲う):

身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけろしのように、食いつくすべきものを求めて歩き回っている。(第一ペテロ 5 章 8 節)

8. 個人的な苦難は私たちを強くする:

それだけではなく、患難をも喜んでいる。なぜなら、患難は忍耐を生み出し、忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出すことを、知っているからである。(ローマ 5 章 3-4 節)

個人的な苦難の歴史的実例:

過去・現在・未来の時代を通して、キリストを信じる者が厳しい迫害を受けてきたことを示す例は数多くあります。個人レベルで見ても、四つの福音書の証言から確信をもって言えるのは、地上での奉仕の期間において、神への献身のゆえに主イエスご自身

ほど多くの苦難を受けた人は他にいない、ということです。

詩篇 22 篇 12-18 節の預言：

(12)多くの雄牛はわたしを取り巻き、バシヤンの強い雄牛はわたしを囲み、(13)かき裂き、ほえたけるししのように、わたしにむかって口を開く。(14)わたしは水のように注ぎ出され、わたしの骨はことごとくはずれ、わたしの心臓は、ろうのように、胸のうちで溶けた。(15)わたしの力は陶器の破片のようにかわき、わたしの舌はあごにつく。あなたはわたしを死のちに伏させられる。(16)まことに、犬はわたしをめぐり、悪を行う者の群れがわたしを囲んで、わたしの手と足を刺し貫いた。(17)わたしは自分の骨をことごとく数えることができる。彼らは目をとめて、わたしを見る。(18)彼らは互にわたしの衣服を分け、わたしの着物をくじ引にする。

イザヤ書 53 章 1-12 節の預言(イクシス・サイトからの直訳)：

(1) わたしたちの知らせをだれが信じたか。主の御腕(すなわち、メシヤ)はだれに現されたか。(2) 彼は主の前に若木のように、かわいた地から〔生え出る〕根のように育った。彼には、わたしたちが目を留めるような〔特別な〕麗しさもなく、わたしたちが心を引かれるような〔目立った〕魅力もなかった。(3)〔それどころか、〕彼は人々にさげすまれ、捨てられた者、悲しみの人で、苦しみを知る者であった。人々が顔をそむける者のように、彼はさげすまれ、わたしたちも彼を何とも思わなかった。(4) まことに彼はわたしたちの病を負い、わたしたちの弱さを担った。それなのに、わたしたちは彼を、神に〔罰せられ〕、打たれ、苦しめられた者と思った。(5) しかし〔実際には〕、彼はわたしたちのそむきのゆえに苦しめられ、わたしたちすべての咎(字義的には「咎々」)のゆえに碎かれた。わたしたちを〔神と〕和らがせるために〔必要な〕懲らしめが彼の上に〔下った〕。彼が傷つけられたことによって、わたしたちはいやされた。(6) わたしたちはみな羊のように迷い、おのこの自分の道に向かって行った。そして主は、わたしたちすべての咎を彼の上に打ちかからせた。(7) 彼は虐げられ、苦しめられたが、ほふり場に引かれて行く小羊のように、その口を開かなかった。また、毛を切る者の前で黙っている雌羊のように、その口を開かなかった。(8) 虐げに満ちた裁きによって彼は取り去られた。だれが彼の子孫のことを心に留めたであろうか。彼は生ける者の地から断たれたからである。彼はわたしの民のそむきのために罰せられた。(9) 人々は彼の墓を悪しき者たちと共に定め、その死(原文のまま)において富める〔人〕と共にした。彼は何の暴虐も行わず、その口には偽りもなかったのに。(10) しかし、彼を碎き、苦しみに遭わせることは、主のみこころ(すなわち「御旨」)であった。だが、あなたが彼のいのちを罪過のためのいけにえとするなら、

彼はその子孫を見、その日々を長くし、主のみこころ(すなわち「御旨」)は彼の手によって栄える。(11) そのいのちに加えられた苦しみから〔解き放たれて〕、彼は〔再びいのちの光を〕見て、満ち足りる(すなわち、復活において)。わたしの義なるしもべは、彼を知ることによって、心のすぐれた多くの者(すなわち、信者たち)に義を与え、彼自身が彼らの咎(字義的には「咎々」)を負う。(12) それゆえ、わたしは彼に〔分捕り物を〕その多くの〔兄弟たち〕の中で分け与え、彼はその中の力ある者たちに分捕り物を分け与える。彼がそのいのちをさらけ出して死に至り、そむく者たち[と同じように]扱われたからである。こうして彼は多くの者の罪を負い、そむく者たちの身代りと〔なった〕。(イザヤ 53 章 1-12 節)

主の足跡に従い、その模範に倣うなら、同様の反対に遭うことを覚悟すべきです。パウロが「私がキリストに倣う者であるように、あなたがたも私に倣いなさい」(第一コリント 11 章 1 節)と言うとき、「キリストの苦しみにあずかること」が除外されているはずはありません。私たちの主を除けば、キリストのためにパウロほど苦しんだ人はいません。

第一コリント 4 章 9-13 節:

わたしはこう考える。神はわたしたち使徒を死刑囚のように、最後に出場する者として引き出し、こうしてわたしたちは、全世界に、天使にも人々にも見せ物にされたのだ。わたしたちはキリストのゆえに愚かな者となり、あなたがたはキリストにあって賢い者となっている。わたしたちは弱い、あなたがたは強い。あなたがたは尊ばれ、わたしたちは卑しめられている。今の今まで、わたしたちは飢え、かわき、裸にされ、打たれ、宿なしであり、苦勞して自分の手で働いている。はずかしめられては祝福し、迫害されては耐え忍び、ののしられては優しい言葉をかけている。わたしたちは今に至るまで、この世のちりのように、人間のくずのようにされている。

第二コリント 11 章 23-28 節:

彼らはキリストの僕なのか。わたしは気が狂ったようになって言う、わたしは彼ら以上にそうである。苦勞したことはもっと多く、投獄されたことももっと多く、むち打たれたことは、はるかにおびただしく、死に面したこともしばしばあった。ユダヤ人から四十に一つ足りないむちを受けたことが五度、ローマ人にむちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度、そして、一昼夜、海の上を漂ったこともある。幾たびも旅をし、川の難、盗賊の難、同国民の難、異邦人の難、都会の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、勞し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢えかわき、しばしば食物がなく、寒さに凍え、裸でいたこともあった。なおいろいろの事があった外に、日々わたし

に迫って来る諸教会の心配ごとがある。

私たち全員が、パウロと同じ程度に「キリストの苦しみにあずかる」([第二コリント 1 章 3-7 節](#))よう召されているわけではありませんが、私たちにもそれぞれの困難な挑戦が用意されています。個人的患難は、パウロのような卓越した信者だけのものではなく、すべての信者に属します。個人的患難の試練に備え、その猛攻に耐えるために、私たち以前に直面したごく普通の信者たちの経験に目を向けることは助けになります。ヘブル書が明白に示すように、過去の信者もしばしば信仰のゆえに苛烈な迫害に直面しました。

このほか、何を言おうか。もしギデオン、バラク、サムソン、エフタ、ダビデ、サムエル及び預言者たちについて語り出すなら、時間が足りないであろう。彼らは信仰によって、国々を征服し、義を行い、約束のものを受け、ししの口をふさぎ、火の勢いを消し、つるぎの刃をのがれ、弱いものは強くされ、戦いの勇者となり、他国の軍を退かせた。女たちは、その死者たちをよみがえらせてもらった。ほかの者は、更にまさったいのちによみがえるために、拷問の苦しみに甘んじ、放免されることを願わなかった。なおほかの者たちは、あざけられ、むち打たれ、しばり上げられ、投獄されるほどのめに会った。あるいは、石で打たれ、さいなまれ、のこぎりで引かれ、つるぎで切り殺され、羊の皮や、やぎの皮を着て歩きまわり、無一物になり、悩まされ、苦しめられ、(この世は彼らの住む所ではなかった)、荒野と山の中と岩の穴と土の穴とを、さまよい続けた。([ヘブル 11 章 32-38 節](#))

ペテロの第一の手紙の受け取り手たちについて： 地上の信者たちの歴史においては、全般的な迫害の時期に、個人的な患難が信仰者の共同体全体に降りかかることがありました。これはまさに、ペテロの読者であった小アジアの一世紀のクリスチャン共同体に当てはまります。このシリーズの最初(第 1 課)で触れたように、西暦 64 年頃、ローマでネロが行ったクリスチャン迫害は、ローマ帝国の属州に影響を及ぼさないはずがありませんでした。ローマの歴史家タキトゥスは、その恐ろしい大虐殺を生々しく描写しています。数日にわたって燃え盛り、ローマ市の大部分を破壊した大火の責任をそらそうとして、ネロはクリスチャンを替え玉にし、常軌を逸した非人道的な拷問の数々にさらしました。信仰だけを理由に、信者たちは十字架につけられ、生きたまま焼かれ、あるいは動物の皮に包まれて野犬に投げ与えられたのです。

古代から残っているわずかな歴史的記録には、ローマでの騒動に続いて起こった、帝国全土にわたる組織的な迫害についてほとんど詳しいことが記されていませんが、

第一ペテロの手紙で言及されている苦しみは、実際、首都で起こったあの恐ろしい出来事の直接的な結果であった可能性が高く、ペテロ自身もそれらの出来事を直接知っていたはずです。というのも、すでに見てきたように、第一ペテロと第二ペテロは、おそらくほぼ同じ時期にローマから書かれたものであり(ペテロ自身も、この残忍な一連の迫害の後、ネロの治世の終わり頃、紀元 68 年のある時点で殉教した可能性が高いのです)。

エルサレム教会の実例：ローマ帝国の属州におけるネロの教会迫害がどのように進み、どの程度まで及んだのかについて、私たちには具体的な詳細が欠けているかもしれませんが、使徒行伝には(現在学んでいる箇所のように、書簡の中にも迫害について多くの言及がありますが、それに加えて)、一世紀のクリスチャンたちが歩まなければならなかった困難な道について十分な証言があります。エルサレムを拠点とする信者の共同体は、キリスト教発祥の中心地において、そのような迫害がどのような影響を及ぼし、どのように進んでいったのかを示す代表的な例です。

・エルサレムの信者たちは、忌避され、経済的孤立と迫害にさらされました([使徒行伝 2 章 42-47 節](#), [4 章 32-35 節](#), [11 章 28-30 節](#), [24 章 17 節](#); [ローマ 15 章 25-28 節](#); [第一コリント 16 章 1-4 節](#); [ガラテヤ 2 章 10 節](#))。

・指導者たちは、鞭打たれ([使徒行伝 5 章 41-42 節](#))、投獄され([使徒行伝 12 章](#))、石打ちに遭い([使徒行伝 7 章 57-60 節](#))、他の処刑も受けました([使徒行伝 12 章 2-3 節](#))。

・信者たちは、その後激しい迫害に遭い、エルサレムから追われ、家々から引きずり出され、投獄され、処刑されました([使徒行伝 8 章 1-3 節](#), [9 章 1 節](#)・[13 節](#))。

・多くの人の信仰は、これらの出来事で厳しい試練を受けました([ヤコブ 1 章 2-7 節](#); [ガラテヤ 3 章 4 節](#); [第一テサロニケ 2 章 14 節](#)参照)。危機ののち、ヘブル書の筆者は彼らが受けた厳しい試練をこう想起します：

あなたがたは、光に照されたのち、苦しい大きな戦いによく耐えた初めのころのことを、思い出してほしい。そしられ苦しめられて見せ物にされたこともあれば、このようなめに会った人々の仲間になされたこともあった。さらに獄に入れられた人々を思いやり、また、もっとまさった永遠の宝を持っていることを知って、自分の財産が奪われても喜んでそれを忍んだ。だから、あなたがたは自分の持っている確信を放棄してはいけない。その確信には大きな報いが伴っている

のである。神の御旨を行って約束のものを受けるため、あなたがたに必要なのは、忍耐である。「もうしばらくすれば、きたるべきかたがお見えになる。遅くはない。わが義人は、信仰によって生きる。もし信仰を捨てるなら、わたしのたましいはこれを喜ばない」。しかしわたしたちは、信仰を捨てて滅びる者ではなく、信仰に立って、いのちを得る者である。([ヘブル 10 章 32-39 節](#))

異教国家に生きるという挑戦： エルサレムの信者の経験は、国家の基盤そのものが偶像礼拝と悪霊崇拝に結びついた社会で、クリスチャンとして生きる難しさを示します。問題はエルサレムだけではありません。黙示録 2-3 章に描かれた小アジアの七つの教会への圧迫を見ると、第一世紀のクリスチャンの多くが日常的に迫害の可能性にさらされていたことがわかります。

小プリニウスの書簡は、初期の信者が常に犯罪者扱いされる危険にあったことを裏づけます。小アジアのビテュニア総督時代(紀元 112 年頃)、彼は皇帝トラヤヌスに「クリスチャン」という名を認めるだけで法的措置を取るに十分な罪となるのかどうかを尋ねています。これは、その時代と場所で信者であることがどれほど危険かを雄弁に物語ります。トラヤヌスの返答は、「搜索はするな。ただし、発覚した者が該当の祭儀を行って信仰を撤回しない場合は処刑せよ」というものでした。

このような脆弱な立場は、初期のクリスチャンたちを様々な悪意に満ちた動機による迫害にさらすことになりました。それは、個人的な理由(たとえば、異邦人が福音に応じたことによって引き起こされた嫉妬 — [使徒行伝 17 章 1-5 節](#))、あるいは経済的な理由(ピリピでパウロとシラスが迫害された例 — [使徒行伝 16 章 19 節](#)、またエペソで、新しい信仰が女神アルテミスの像の商売を脅かすと恐れられたために起きた暴動 — [使徒行伝 19 章 23-41 節](#))などでした。また、ローマ社会の至る所に浸透していた異教的な影響を避けることも容易ではありませんでした。ほんの一例を挙げるなら、商売や何らかの職業に携わっている人の場合、その地域の該当するコッレーギウム collegium (同業組合)に関わらずにいることは非常に困難だったでしょう。コッレーギア collegia (英語の "college(コレッジ)" という語はここから来ています)は、商業や職業に関する組織であり、今日の私たちの社会で言えば、地域の経済団体(ロータリー、キワニス、商工会議所など)、専門職団体(医師にとっての AMA[米国医師会]や、弁護士にとっての弁護士会など)、そして労働組合が果たしているようなものを含め、実にさまざまな役割を果たしていました。これらの多様な機能を一つに兼ね備えていたことを考えれば、該当するコッレーギウムに属していないクリスチャンの商人や職人が、仕事で成功することに困難を覚え、まして人目につかずにいることはさらに困難であった理由が容易に理解できます。問題は、すべてのコレギウムが、それぞれ関連する異教の神々

に奉献されており、入会の儀式には犠牲の供え物や聖餐的な食事、その他の偶像礼拝が伴っていたことでした。これらはすべて、クリスチャンには固く禁じられているものでした([出エジプト記 23 章 13 節](#); [ヨシュア記 23 章 7 節](#); [詩篇 16 篇 4 節](#)参照)。

したがって、1 世紀の信者たちは、現代社会に劣らぬほど墮落した社会の圧力や誘惑に対処しなければならなかっただけでなく、一方では迫害の絶え間ない危険に、他方では妥協の誘惑に、常に警戒していなければなりませんでした。そのような環境の中で、個人的な悲劇や挫折はなおさら重くのしかかり、霊的成長を阻害する大きな妨げとなったでしょう。そのような中で耐えるためには、強く、積極的な信仰が不可欠だったのです。

この初期の信者たちにとって、「個人的な患難」という言葉は、特別な重みを持って響いたに違いありません。皮肉なことに、そうした形成期こそ、イエス・キリストの教会がこれまでに経験した中で最も活気に満ち、電撃的な時代でもありました。テルトゥリアヌスの有名な格言「殉教者の血は教会の種である」がまさに実証されたのです。実際、エルサレムの教会がそうでした。ルカは、彼らが受けた迫害が、キリストの教会の成長に直接的かつ肯定的な影響を及ぼしたことをこう記しています。

さて、散らされて行った人たちは、御言を宣べ伝えながら、めぐり歩いた。(使徒行伝 8 章 4 節)

将来の艱難期における迫害のパターン：もちろん、信者として私たちが経験する個人的な患難が、再び信仰のゆえの大規模な迫害の一部になることは決してない考えるのは誤りです。たとえば『フォックスの殉教者の書』には、宗教改革時代に多くの信者たちが受けた恐ろしい迫害の様子が生々しく記されています。そして殉教は今日でも続いています。全体主義国家(中国など)や神権国家(スーダンなど)では、今この時もイエス・キリストへの信仰のゆえに迫害や死に直面している信者たちがいます。また、このようなことが自分の国では絶対に起こらないと考えるのも誤りです。というのも、神が今の「不法への抑制」を取り除かれる時、全世界は大患難へと突入するからです([テサロニケ第二 2 章 6-12 節](#); [黙示録 6-8 章](#))。

その日には、神が万物を造られた創造の初めから現在に至るまで、かつてなく今後もないような患難が起るからである。(マルコ 13 章 19 節)

ここで言う「患難」(tribulation)という言葉は、これまでの学びで「個人的な患難」と訳してきたギリシヤ語 $\theta\lambda\acute{\iota}\psi\iota\varsigma$ (thlipsis, スリプシス) と同じです。

これらのことをあなたがたに話したのは、わたしにあって平安を得るためである。あなたがたは、この世では**なやみ**＜スリプシス＞がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている。[\(ヨハネ 16 章 33 節\)](#)

将来の「大きな患難」([マタイ 24 章 21 節](#); [マルコ 13 章 19 節](#))の性質は、黙示録的な嵐を耐え抜くためにどれほど揺るぎない信仰が必要とされるかについて、私たちに警告を与えています。そして、この大患難は、今日生きている私たちすべてが実際に耐え忍ぶよう求められる可能性のある期間です。歴史の最後を飾るあの悲惨な一章について預言されているいくつかの傾向を見ると、それは次のような時代になることがわかります……

- ・前例のないほど多くの信者が主から離れる「大背教」([マタイ 24 章 9-14 節](#); [第二テサロニケ 2 章 3 節](#); [第一テモテ 4 章 1 節](#))。
- ・激しい軍事的征服([ダニエル書 7 章・9 章・11 章](#); [エゼキエル書 38-39 章](#); [黙示録 6 章 2 節](#); [13 章](#))。
- ・内乱([黙示録 6 章 4 節](#))。
- ・深刻な経済的困難([黙示録 6 章 6 節](#))。
- ・飢饉・疫病・自然災害による壊滅的な死([黙示録 6 章 8 節](#); [イザヤ書 13 章 12 節](#))。
- ・聖書的キリスト教に対して極度に敵対する、完全に一体化された異教宗教([黙示録 13 章](#))。
- ・キリストを真に信じる者たちの広範囲にわたる殉教([黙示録 6 章 9-11 節](#))。
- ・地上に下される極端な超自然的裁き([黙示録 6 章 12 節-](#), [9 章 1 節-](#), [16 章 1 節-](#))。

この大患難の時代はあまりにも苛烈で、その試練に直面する信者たちの信仰への挑戦があまりに大きいため、主ご自身が次のように言われたのです。

人の子が来るとき、地上に信仰が見られるであろうか」([ルカ 18 章 8 節](#) 同 [17 章の文脈](#))で。

しかし、それでもなお信仰に留まる人々があります。彼らの信仰は、大患難のただ中で試され、清められ、精錬されるのです([ダニエル書 11 章 35 節](#), [12 章 10 節](#); [第一ペテロ 1 章 6-9 節](#)参照)。

殉教についてのさらなる学びは以下を参照してください:

「殉教と永遠の報い」(「来たる艱難期 第 6 部」)

[「殉教者の収穫」](#)(「来たる艱難期 第 4 部」)

[「大迫害」](#)(「来たる艱難期第 4 部」)

忍耐の大切さ:

ですから、私たちが大患難に直面するにせよ、あるいは「単なる」個人的な患難に直面するにせよ(それもまた私たちの信仰にとっては十分に「大きな」試練となり得ます)、そのような困難を通して信仰を持ちこたえることの重要性は、いくら強調してもしすぎることはありません。私たちは心に刻むべきです。これらの危機は、信仰を限界まで試す潜在力を持っているのです。

私たちは、信仰を守ることの重要性を軽視してよいのでしょうか？
信仰を強める機会を一度でも逃してよいのでしょうか？
要するに、私たちの主イエス・キリストにある死に対する勝利である信仰を、少しでも緩めるようなことをしてよいのでしょうか([第一ヨハネ 5 章 4-5 節](#))？

これらの問いを念頭に置きながら、次回は忍耐の原則を改めて取り上げ、個人や全体に及ぶ患難の圧力の中で信仰から離れていく「背教」の過程を考察し、さらにその先の学びとして「個人的救い」、すなわち忍耐の目標について扱っていくことにします。

< ペテロ・シリーズ#26「個人的患難への反応」に続く >